

●共通教材ノート

ピアノ五重奏曲

ます

渡邊學而 音楽評論家

シューベルトのピアノ五重奏曲「ます」の作曲事情については、現在次のようなことが定説になっている。

*

1819年の夏、シューベルトは歌手のミハエル・フォーグルとともに上部オーストリアに旅行し、山間の小さな町シュタイアに滞在した。この時町の有力者の一人、ジルベスター・パウムガルトナーの家に泊まり、暖かいもてなしを受けた。パウムガルトナーはたいへんな音楽愛好家で、自分でもチェロなどの楽器を演奏し、2階のサロンに音楽好きな人々を集めてよく音楽会を開いていた。この五重奏曲はその折にパウムガルトナーの特別の依頼によって作曲されたもので、第四楽章の変奏曲の主題に歌曲「ます」を使ったのは、パウムガルトナーがこの歌曲を好んでいたからである。

ところで、こうした作曲の経緯は、シューベルトの友人で当時シュタイアの州役所の書記官補をしていたアルベルト・シュタトラーが記した回想録を、その唯一の根拠にしている。しかし、この回想録は、シューベルトが亡くなってから30年も経った1858年に書かれたもので、シュタトラーも64歳になっていた。そのため不正確なところや記憶違いなどが随

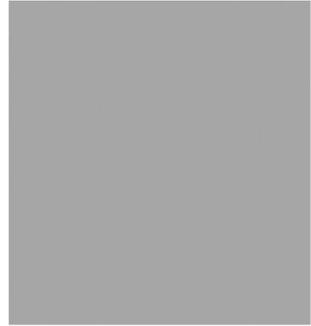
所にみられるのである。

シューベルトはこのシュタイアに3回旅行をしている。1819年、1823年、そして1825年である。そのうち1819年の時には、シュタトラーの伯父にあたるアルベルト・シェルマン博士の家に泊まり、この家の近くにある大商人ヨーゼフ・フォン・コラーの家で毎晩のように音楽会が行なわれたことが知られている。というのもコラー家の娘ヨゼフィーネがすぐれた音楽的才能をもっていたことによる。

そして実際にもシュタトラーは、この回想録の数ヶ月後に追加分として書いた文章の中で、「1819年にシューベルトが私の伯父である弁護士アルベルト・シェルマンの家に泊まったのは確実です。……1825年にフォーグルと一緒にパウムガルトナーの家に泊まったことは、疑う余地はありません。」と記している。しかし1823年については、彼がすでにシュタイアにいなかったこともあって、シューベルトが滞在したかどうか記憶にない、といっている。

*

以上のことから、1819年にはパウムガルトナー家には泊まらなかったことが明らかになっている。だからこの年にシュ



ーベルトがパウムガルトナーと親しく付き合ったという証拠はないのだが、しかしだからといって知り合わなかったという確たる論拠もない。

しかしこの他にいくつかの点から、この五重奏曲が1819年の作品ではない可能性が十分に考えられるのである。

その一つは、シューベルトがこの曲を作曲するにあたって参考にした作品の出版年である。この特殊な編成によるピアノ五重奏曲の形は、シューベルトの独創ではなく、ヨハン・ネポムク・フンメル（1778～1837）の「ピアノ五重奏曲変ホ長調作品87」をモデルにしたことは確かである。シュタトラーにいわせれば、それがパウムガルトナーの注文であったという。そしてこのフンメルの作品は、1820年以降（おそらく1822年）にウィーンで出版されているから、よほど当時この曲がウィーンで有名であったか、あるいはシューベルトがフンメルとよほど親しく付き合っていたか、という条件がなければ、出版前にこの曲を詳しく知り得ることは不可能だし、ましてやシュタイアにいたパウムガルトナーが知る機会はもっと少なかったといえる。

*

もう一つは、第四楽章の主題に用いた

歌曲「ます」である。これはシューベルトが何回も書き直したために、全部で五つの版がある。最初の二つの版は1816年末から1817年7月の間に作曲されている。第三版は例のヒュッテンブレンナーに送ったもので、1818年2月21日の日付けをもっている。第四版は1820年秋、第五版は1821年10月で、この最後の版だけに5小節の前奏が付けられている。

このうち、シューベルトの生前に出版されたのは第四版だけで、まず1820年12月9日にウィーンのある雑誌の付録として出版され、その後1825年1月13日にウィーンのディアベリ社から単独で出版された。

*

歌曲「ます」は作曲当初からたいへん人気があったから、シューベルトはシュタイアでも当然演奏したとも考えられるが、1819年にコラー家で演奏し、それをパウムガルトナーが聴いた可能性は非常に少ないように思われる。

以上のようなことから、五重奏曲「ます」は1819年ではなくて、1823年、あるいは1825年に作曲された可能性も強いのだが、この曲の自筆譜は失われているために、その正確な作曲年代はなかなか確定できないのである。